沼津市

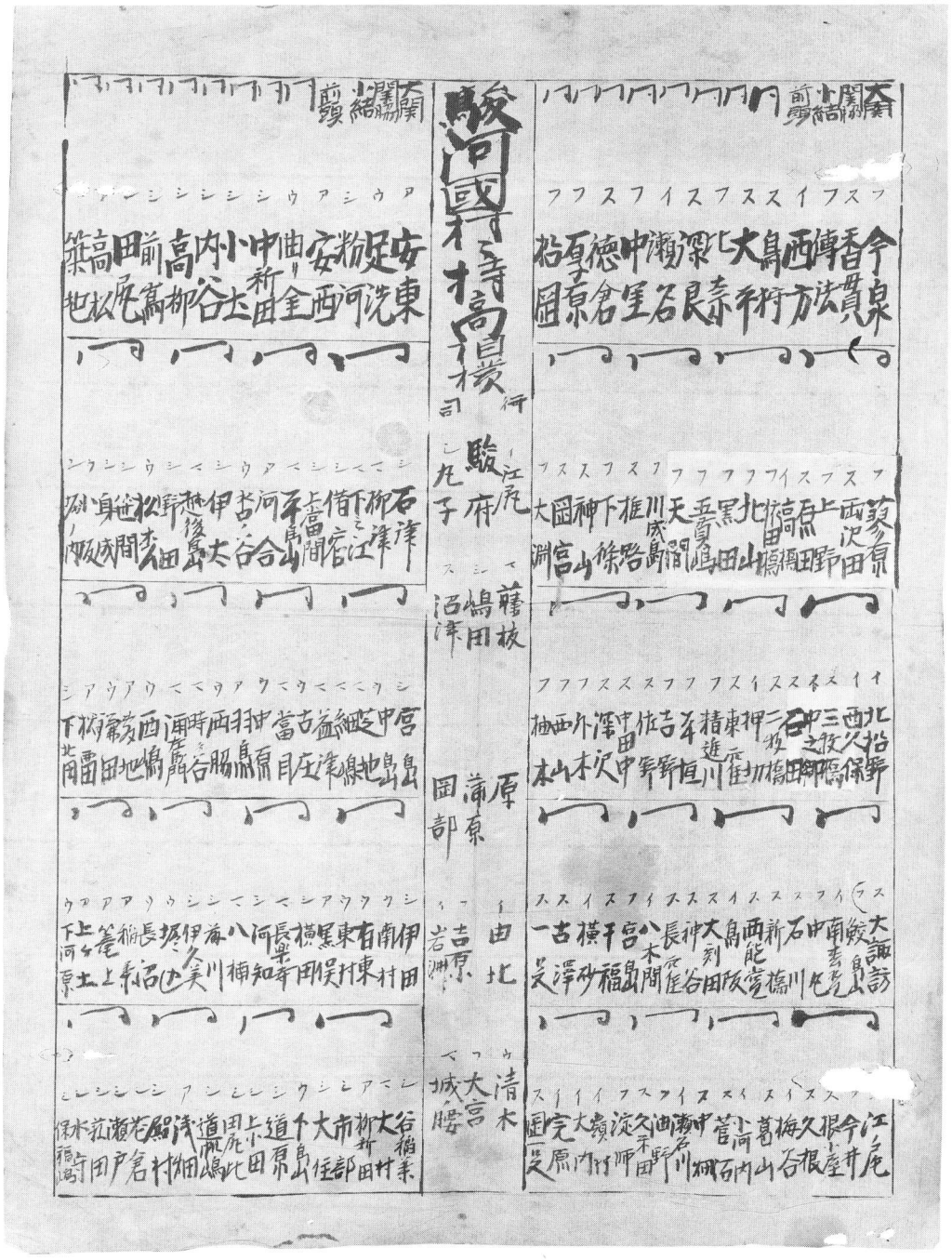
明治史料館通信

1995．4．25（季刊 年4回発行）Vol. 11 No. 1　通巻第41号

駿河国村々持高相撲

駿河国の村々の大きさ（村高）を相撲の番付表に見立てたもの

（庄司俊一氏寄贈）



ぬまづ近代史点描 ㉖

村の中の村

前ページに掲げた史料は、「駿河国村々持高相撲」という表題がつけられた、駿河国内の村々についてその村高の大きいものを相撲の番付に見立てランキングしたものである。村高とは、年貢を賦課するための基準として検地によって決定された公定生産高であり、村落の大きさを示す指標であった。駿河国には、天保五年（一八三四）時点で七八〇の宿村があったが（天保郷帳）、この番付にはその内の一六〇か村が掲載されている（宿については、「行司」として除外されている）。

沼津市域からランキングされているのは左の村々である（村高は仮に天保郷帳による）。

「香貫」　合計　二〇七四石余
　上香貫村　八八〇石余
　三十郎新田　一四三石余
　下香貫村　一〇五一石余
「大平」　大平村　一七二二石余
「両沢田」　合計　一六〇〇石余
　東沢田村　三八六石余
　中沢田村　六一四石余
　西沢田村　六〇〇石余
「椎路」　椎路村　一一一二石余
「岡宮」　岡宮村　六八八石余
「三枚橋」　三枚橋町　六九六石余
「石田」　合計　一三〇五石余
　上石田村　四〇〇石余
　中石田村　五〇三石余
　下石田村　四〇二石余
「大諏訪」　大諏訪村　五二八石余
「石川」　石川村　五二〇石余
「西熊堂」　西熊堂村　五一〇石余
「根小屋」　根古屋村　四三七石余
「岡一色」　岡一色村　三四六石余

ちなみに、東の大関・富士郡今泉村は三〇九一石余である。天保郷帳による全国平均値は四八二石である（『日本の近世8』）。

なお、この番付表はいつの時点でのものなのか不明であり、元禄郷帳や天保郷帳とは単純に比較できないが、掲載されていない村のほうが掲載されている村よりも大きいという事例がいくつもあり、矛盾点がみられる。たとえば沼津市域に限ってみても、六二四石余の井出村、五九八石余の青野村などが登場していない。また、三枚橋町を沼津宿と区別している点、上・下香貫村、東・中・西沢田3村、上・中・下石田3村などをいっしょにしてしまっている点なども、厳密さに欠けるようだ。

ところで、この番付表で東の関脇に位置づけられた上・下香貫村、同じく前頭三枚目の大平村は、沼津市域の中では平坦地が多く、かつては一面の水田地帯であり、村高が大きいのはもっともである。特に大平村は、明治二十二年（一八八九）の町村制施行後も、他の村々のように合併をすることなく、単独の村として存続し、昭和三十年（一九五五）の沼津市合併に至った。

徳倉山を挟んで所在する香貫と大平の共通点には、広い村域の中に小集落が散在するということがあげられる。そして、この小集落こそが住民の生活・生産の基本的な単位であり、いわば「村の中の村」ともいうべきものであった。また、実際にこれらの小集落についても「村」と呼称された事実が知られる。たとえば、下香貫村の森田家文書（当館所蔵）からは、同村内について以下のような記述例が見出される。

「塩満村」　延宝7年
「八重原村」　元禄12年
「石原村」　安永8年
「桃郷村」　享和3年
「六反村」　嘉永3年
「馬場村」　慶応3年
「山ノ根村」　明治7年

大平村の場合も、村内十五の小集落がそれぞれ「三分一村」「大井村」「御前帰村」などと称することがあった。

勿論これらは一種の俗称であり、公式の場合には使用されなかったようだ。沼津市域の別の村ではこのような小集落もしくは村内の組を「町内」と称した事例もありその名称は現在も生きている。

表中のカタカナは郡名を表す
ス駿東郡　ア安倍郡　マ益津郡
フ富士郡　ウ有渡郡
イ庵原郡　シ志太郡

シリーズ
沼津兵学校とその人材 38

洋学者・竹原四兄弟

沼津兵学校の三等（のち二等）教授に石橋好一（旧名鎗次郎、一八四六～一九一四）がいた。彼は開成所出身の英学者であり、上京後も明治政府に仕え開拓使・文部省・海軍兵学校などで翻訳を担当した。『体操書』（明治七年刊）・『地理描図法』（同九年刊）・『訓蒙勧懲雑話』（同前）・『小児養育談』などの訳書・校訂書がある。

吉沢勇四郎
（石橋誠一氏提供、2点とも）

右から竹原俊勝、石橋好一、吉沢忠則

彼の実父は幕府の御細工所同心竹原五左衛門といったが、その四人の息子たちは兄弟そろっての洋学者だった。

長兄は竹原平次郎といい、昌平黌を安政六年（一八五九）乙科で及第（「昌平学科名録」『江戸』第2巻）、後に開成所化学教授出役（慶応二年六月時点）となった人物である。『化学入門』（初編、慶応三年刊）という訳書がある。戊辰戦争では江戸開城に際して脱走軍に加わり東北地方を転戦、明治二年正月には弟石橋好一がいる沼津に逃げ戻り、官軍の追及をのがれたらしい。当時沼津兵学校化学方だった桂川甫策が東京の兄にあてた手紙に「此節竹原平次郎奥州ヶ沼津江帰り　当節ハ拙宅ノ近所ニ潜り居」とある（『蘭学の家桂川の人々　最終篇』）。その後俊勝と改名し、明治三十八年一月五日に亡くなったらしいが、その間の経歴は不明である。

次兄吉沢勇四郎は、万延元年（一八六〇）八月に蕃書調所英学句読教授出役に任命され、翌文久元年六月には英学教授手伝並出役となった。その後陸軍に転じたらしく、陸軍所が出版した『斯氏築城典刑』（慶応元・二年刊）、『火功奏式』（慶応二年刊）は彼の訳書である。慶応四年二月には砲兵差図役頭取から工兵頭並となり、同僚の小菅智淵とともに箱館戦争に参加、明治二年五月十一日、三十一歳で戦死した。

石橋好一の三歳年下の弟で、竹原家の六男・竹原安太郎は、万延元年四月、十二歳の時、兄好一や西周らとともに選抜され、イギリス公使の宿舎である高輪の東禅寺において英語の学習をすることを命じられた。元治元年（一八六四）時点では開成所の稽古人だった。その後の経歴は不詳だが、戦死した兄吉沢勇四郎の家に養子で入り、吉沢忠則と名乗ったようであり、明治二十七年七月二十二日に亡くなった。

以上、竹原兄弟の蕃書調所・開成所で洋学・英学を学習したことから始まる履歴からは、幕末期の人材登用政策に乗り、一家を挙げて立身していった幕府下級官吏の姿が見てとれる。能力主義の採用は封建的な身分秩序の一角を打破し、竹原兄弟も御細工所同心という父祖伝来の家柄を超越していったのである。静岡藩・沼津兵学校の人的構成も、明治政府の官僚制度も、幕末におけるこのような動きの延長に位置するものであった。沼津兵学校の教授・生徒は学識の程度や試験で選ばれたし、明治新政府の官僚内にも藩閥はあったが門閥はなかったのである。

お知らせ欄

◎『沼津市博物館紀要19』の刊行について

体裁：B5版　七七ページ
頒価：一〇〇〇円
内容：瀬川裕市郎「愛鷹山麓の旧石器時代の構造（3）」、竹内栄「沼津市における山神社の分布と祭祀」、樋口雄彦「『輿地航海図』の訳者武田簡吾について」、同「史料紹介　間宮喜十郎の東京留学日誌」

◎ゴールデンウィーク中の開館について

休館日：5月1日（月）、6日（土）
これ以外は開館します。

◎5月19日は無料開館日

5月19日（金）は、江原素六が亡くなった記念日ということで観覧料が無料になります。墓前では江原素六先生顕彰会による記念祭が行われます。

◎平成6年度調査来館者抄録

4・10　沼津市史編纂近現代委員
4・17　静岡県立美術館学芸員
5・8　沼津市史近現代部会委員
5・15　沼津市史近現代部会委員
7・16　沼津市史近現代部会委員
7・22　同右近世部会（～23）
7・29　沼津市史近世部会委員
8・2　沼津市史近世部会委員
8・10　松戸市立博物館学芸員
9・9　小島資料館
10・4　国士館大学史学科
11・4　沼津市史近現代部会委員（～6）
11・12　戦国史研究会
11・15　埼玉県地域史料保存活用連絡協議会
11・25　沼津市史近現代部会委員（～26）
12・10　同右（～11）
12・22　同右
12・27　静岡高校郷土研究部
1・9　沼津市史近現代部会委員（～11）
1・24　同右
1・29　同右・同中世部会委員
2・8　沼津市史近現代部会委員
2・17　同右（～19）
2・22　同右漁村史部会（～23）
3・2　静岡県史編さん室員・沼津市史近現代部会委員
3・3　沼津市史近現代部会委員（～5）
3・14　千葉県印西町・栄町史編纂室員
3・24　藤沢市教育史編さん室員
3・28　沼津市史自然環境部会委員

◎平成6年度の主な資料貸出先

磐田市教育委員会（赤松則良関係史料）／沼津市立図書館（絵はがき）／静岡県立美術館（川村清雄作品）／松戸市立博物館（愛鷹牧関係史料）／沼津市立図書館（原宿関係史料）／佐倉市中央公民館（大築尚志写真）／小学館（伊庭八郎錦絵フィルム）／毎日グラフ（広重画沼津浮世絵フィルム）／学研（沼津兵学校関係写真フィルム）／中京テレビ（広重画沼津浮世絵フィルム）

◎館職員の人事異動について

4月1日・4日付の人事異動により、館長川田弘が退職、後任に山本啓司（社会教育課長と兼任）が着任、主査長澤利之が国民年金課に転出、後任に副参事補石内進（市史編さん係長）が着任、嘱託堤健二が退職、後任に武田藤男（前市立沼津高校教諭）が着任しました。今後とも変わらぬご支援をお願い申し上げます。

沼津市明治史料館通信　第41号
編集　沼津市明治史料館
発行　沼津市明治史料館
〒410 沼津市西熊堂三七二―一
電話　〇五五九―二三―二三三五
FAX　〇五五九―二五―三〇一八

★今年で戦後50年

夏の企画展では「昭和の戦争と沼津」（仮称）というテーマで十五年戦争と地域との関わりを取り上げます。戦争中の資料（文書・写真・物品など）をお持ちの方は是非お知らせ下さい。